

住宅を開き合う自治組織の実態と活動の効果に関する研究：グループ・スコアを対象として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院工学研究科都市系専攻 公開日: 2023-04-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奥野, 湧太 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2011601

住宅を開き合う自治組織の実態と活動の効果に関する研究 —グループ・スコーレを対象として—

A STUDY ON THE ACTUAL SITUATION AND EFFECTIVENESS OF AN AUTONOMOUS ORGANIZATION THAT OPEN HOUSES —FOR GROUP SCHOLE—

建築計画・構法分野

奥野 湧太

Architectural Planning & Building System

Yuta OKUNO

人口減少や地域コミュニティ衰退、ニーズの多様化の問題を抱える我が国では、行政に頼らない、従来の区域単位から広域的に捉えたコミュニティの在り方が求められている。本研究では複数人が住宅を開きコミュニティの場づくりを行う「グループ・スコーレ」を対象に、自治組織の運営や利用者の実態、コミュニティや住意識、住空間の影響に関する調査を行った。そして、自治組織の運営における要点、自治組織として住宅を開くこと及び開き合うことの効果と可能性を明らかにした。

In Japan, where the problems of declining population, declining local communities, and diversifying needs are being faced, there is a need for a way of community that does not rely on the government and is viewed from a broader perspective than the traditional area-based approach. In this study, we conducted a survey on the management of autonomous organizations, the actual situation of users, community and housing awareness, and the influence of housing space, targeting "group schole," in which several people open houses to create a community space. The study clarified the key points in the management of autonomous groups, and the effectiveness and potential of activities to open houses as autonomous groups and to open each other's houses.

1. はじめに

1-1. 背景・目的

高度経済成長時代の我が国では千里ニュータウン等の都市開発において、小学校区をコミュニティ単位とする近隣住区論が用いられた。しかし、現在は人口減少や超高齢社会の影響で地域の愛着低下や地域コミュニティの担い手の減少等による地域コミュニティの衰退が問題となっている。ところが近年、中学校区を日常生活圏域と捉えた地域包括ケアシステムや様々な機能を近隣の複数集落で補い合うネットワーク・コミュニティの構築¹⁾等、従来とは異なるコミュニティの形成が実践されている。これらの一区域単位に留まらない広域的に捉えたコミュニティの形成は今後、全国各地で求められることが予想される。

一方で、行政によるコミュニティの場づくりはニーズの複雑化・多様化により、柔軟かつ即時的な対応が困難である。これに対して、自宅の一部を他者へ開く「住み開き²⁾」は地域コミュニティの希薄化を解決する一手法として可能性がある。さらに、ストック活用による場づくりは空き家問題の改善にも役立つ。

そこで本研究は、自治組織内で互いに住宅を開き合い、コミュニティの場づくりを行う取り組みに着目し、組織運営と利用者の実態を把握し、持続的な組織運営

のための要点をまとめる。さらに、住宅を開き合う活動によるコミュニティの特性や活動者の住意識、住空間に対する影響を把握し、コミュニティの在り方や空き家問題の緩和等、活動による効果と可能性を考察することを目的とする。

1-2. 研究対象の選定

住み開き提唱者の書籍にある 35 事例を多拠点性と活動継続性の観点で分類した。その結果から、唯一自治で複数人が自宅開放活動を現在まで継続して行っている「グループ・スコーレ」を本研究の対象とした。

1-3. 研究の位置づけ

住宅を開く活動を対象にした先行研究では、自治で一住戸を他者へ開く事例を対象に様々な研究がなされている。さらに、行政支援を受けて複数人が他者に住宅を開く、一般社団法人世田谷トラストまちづくり「地域共生のいえ支援事業」を対象に、事業運用の実態³⁾等の研究が進められている。

これに対して、本研究の独自性は研究対象のみならず、運営や利用の実態を把握することに加え、活動によるコミュニティの特性や住空間への影響等を把握し、住宅を開き合う活動を多角的に評価する点にある。

1-4. 調査対象「グループ・スコーレ」の概要

グループ・スコーレは、平均年齢 76.3 歳のシニア世

代で構成された自治組織で 1997 年に発足した。主な活動である講座は 60 講座存在し、会員 205 名のうち 30 名が自宅を開放している（表 1）。会員は、堺市南区を中心に大阪府下で広域的に分布しており、持家の戸建住宅が多い一方で分譲の集合住宅も一部みられる。

1-5. 調査概要

まず、組織運営の実態（2 章）を把握するため、組織独自の過去資料を用いた文献調査、組織活動の観察調査、運営の主要メンバーに対するヒアリング調査を実施した。次に、利用者の実態（3 章）、自宅開放による住意識と地域コミュニティ（4 章）、住空間の影響（5 章）を把握するためアンケート調査（回収率 38.9%）とアンケート調査にて了承の得られたものを対象にした訪問調査（ヒアリングと間取り採取）、訪問調査の結果を用いた GIS 分析を行った。

2. 組織運営の実態

本章は組織運営のメカニズムを明らかにする。

2-1. 組織開設の経緯

理事長の【TYK】は、自宅で行う学習塾を 50 歳でやめて以降、しなければいけないことが何もない状況に生きがいを失った。そんな中、運営の主要メンバーである【YMY】を含む友人たちを家に招いて料理を振舞っていた時の雑談から、自宅に招き合い趣味を共に楽しむ活動を組織化するアイデアが生まれ、グループ・スコーレが発足した（表 201・02）。つまり、老後生活の中で自宅に招き合いお茶を飲みながら世間話や趣味を楽しむ活動の継続を図るために組織化に至っている。

2-2. 組織開設から運営における思い

理事長は、お金が絡まないボランティアへの興味と生活におけるコミュニケーションの重要性に意識があり、開設当初から行政に頼らず、互いに助け合う生活を意識した。また、本音の言い合える平等な関係性を築くことを目指して組織運営に取り組んだ（表 203）。

2-3. 運営体制

運営体制は、理事長と数人の役員が集まる役員会で組織運営に関する様々なことが議論され、講座の開講者が集まるリーダー会での議論を経て実施される。リーダー会では、役員会で検討された議論の決定がなされる他、組織内イベントの報告、収益及び還元金額など毎月の組織活動に関する様々なことが共有される。この体制は発足当初から変わらずに継続されている。

2-4. 講座活動

講座は、開講者の自宅に参加者が集まり次第開講され、講座後にはお茶をして自由に雑談や世間話をする時間（以下「お茶タイム」）が設けられている（図 1）。なお、参加時にはお茶代として 500 円を開講者に支払い、講座開始からお茶タイム、解散までの準備や片付

表 1 調査対象「グループ・スコーレ」の概要

発足時期	1997 年 7 月	性別	男女比 約 1:9 ^{※2}
会員	208 名 ^{※1}	持家戸建	80.0% ^{※2}
年齢	平均年齢 76.3 歳 ^{※2}	分譲集合	17.1%
講座	60 講座 ^{※1}	賃貸集合	2.9%
自宅開放	30 名 ^{※1}	住宅規模	平均 144.7 m ² ^{※3}

※1 2022 年 8 月時点 ※2 アンケートの調査結果 ※3 訪問調査の結果

表 2 運営者ヒアリングの結果

01 組織開設の経緯 【TYK】元々、実家から始めて自宅で塾を 30 年していました。シャンソンが趣味で公演を見に行きたいのですが、塾の時間と被ってしまっかなか行けていませんでした。学習塾の経験で教えることには情熱が必要だと思っていましたが、徐々に情熱が薄れてしまい、50 歳で辞める段取りをとって 3 年間頑張ってから辞めました。それから 3 年間は趣味の女性老人問題の講義行ったりしていました。しかし、何もすることがなくて自分探してみたいな、うつ病になりかけていた。その頃に、料理が好きだから YMY さんと他 3 人ぐらいいに振舞って一緒に食べていましたが、この形だと長く続かないので困っていたところ、これを組織にすればいいのではないかと話が出ました。私はびっくりしましたが、私の中でしたいことが頭にありましたのですぐやることになりました。
02 組織開設時の思い 【TYK】お金儲けが絡むことは塾で嫌になりましたので、お金が絡まないボランティアがよかったのです。 【TYK】自分自身は 53 歳、夫は 57 歳で 3 年後には退職します。そうすると、定年退職後はどのような生活になるのかと考えるようになりました。今よりも豊かでないことは社会的に色々聞いていました。なので、私たちは今あるものを全部うまく使ったらいいのではないかとこのことで自宅開放にたどり着きました。娘息子が開設して 2 年後に家を売ったので、家も広々と自由に使えます。昔の長屋暮らしというものがありますね。ちょっと立ち話してという間の時代ですね。
03 組織運営における意識 【TYK】遠くに住む家族を頼ることはできませんので、ある程度の中年くらいからいろんな人とコミュニケーションを図り、我慢するところは我慢して、言うことは言えるような人間にならなければいけないと思っています。私たちが気を使っているところは、本音が出せる場にならないといけないと思っています。いい嗜好をしない、どこかの家にもそんなことあるよというムードづくりをしないといけないと思っています。案外雰囲気も心掛けてます。
04 自宅開放までの流れ 【TYK】入会時に書いてもらうアンケートを見つつ、講座に参加されているところを観察していて、出来そうだなと思う人をお願いをします。初めは、皆さん謙虚なので「私には無理だ」と断られます。しかし、私たちは学び習得することが目的ではなく、楽しむことが目的なので大丈夫だと伝えます。



図 1 自宅開放活動の風景（右：麻雀講座、左：お茶タイム）

けは参加者全員で行う。また、複数講座があるためメンバー間で互いに教え合う関係になっている。自宅開放の流れは、組織入会時に趣味趣向などの基礎情報を記入するアンケートと講座参加中のふるまいを観察し、講座の開講ができそうな人に理事長が声をかけて開講を促す。断る人も多いが趣味を習得するのではなく楽しむことが目的であることを伝えている（表 204）。

2-5. 組織の変遷

会員数と講座数、収益金額の変遷、独自のしくみの発生時期を示した組織の変遷を図 2 に、独自のしくみの概要を表 3 に示す。まず発足から 1～3 年目には、組織活動における基本的な 5 つの約束の「じちこぶち」と「紹介制の入会」が作られ、価値観を共有した組織づくりが行われた。また、組織に関する情報共有と同時に個々の主体性を促す「スコーレ通信」や生活圏内での交流を行い、日常的な助け合いを促す「地域お助けマンくらぶ」のしくみが作られた。4～14 年目には講座の参加を助ける「車の乗合」が作られ、年に 1 度開催されるバザーの収益金額は 30 万円前後を保っている。また、会員数は年々増加傾向にあり 12 年目にピークを迎えるが、それ以降は減少傾向にある。講座数も同様に年々増加傾向にあるが、11～16 年目まで停滞する。15～18 年目には、講座の際に作りすぎた料理や農作物を売買して組織の資金とする「事前販売」を始

表 3 組織独自のしくみ

No.	しくみ	内容	経緯・目的
①	じちこぶち	団体で示される5つの約束を簡略化した造語 ①時間が守れますか ②ちょっとおしゃれしてみませんか ③心から笑いたいと思いますか ④ちょっとプラス思考に考えてみませんか ⑤ちょっと人の為に役立ちたいと思いませんか	組織として必要最低限の基本的な統率をとるため
②	スコール通信	月に一度配布される独自の情報共有メディア 内容：①組織活動の報告 ②収益・還元金の報告 ③組織活動協力をお願い ④行事の連絡 ⑤行事の感想 ⑥健康に関する注意管理	書いた人や見た人が主体性を抱くことを意図
③	地域お助けマン くらぶ	10 地域に分割された地域ごとに連絡を取り合う 定期的に食事会やバザーなどの交流を図るイベントも行われる 講座とは異なり日常生活における細やかなフォローアップを促す	老後の生活を見据えて、生活圏内のコミュニケーション機会を生むため
④	紹介制の入会	メンバーの紹介がなければ入会できない	ボランティア的活動も承知の上で加入してほしいため
⑤	車の乗合（同意書）	事故に備えて同意書を用意	駐車場の問題で車の台数を減らすため
⑥	がん検診	互いに声をかけ合うしくみで1 回のがん検診の受診で2 スタンプ	がんの早期発見し、健康的な老後生活を送るため
⑦	事前販売	講座の前後で不要な物や作りすぎた料理・農作物を売買するしくみ 収益は組織の運営資金となる	バザーの出品量の減少と農作物を作りすぎて困っている メンバーの存在、メンバーの手間を省くため
⑧	スタンプカード	講座参加で1 スタンプ付与、50 スタンプで高島屋の金券に交換収益金の増加に伴い、21 年目に500 円から1000 円にアップ	収益金の増加に伴ってメンバーへの還元と講座参加・外出を促すため
⑨	還元イベント	旅行や食事会、パーティ等の独自イベントにおける参加費の割引	
⑩	車の乗合（200 円）	同意書に加えて片道 200 円の料金を設けた相乗りのしくみ 無免許者のみが対象	免許返納者の増加し、講座参加する際の移動補助を促すためと乗せてもらう 側の心苦しさ解消のため
⑪	go to スコール 講座共通券	1 人4 枚で 2000 円分の講座参加が無料でお年玉として各メンバーに配布	収益金の増加に伴ってメンバーへの還元と講座参加・外出を促すため
⑫	ミニバザー	各地域お助けマンくらぶで年1 回、小さいバザーを開催	コロナ流行により年1 回の大規模なバザーの開催が困難

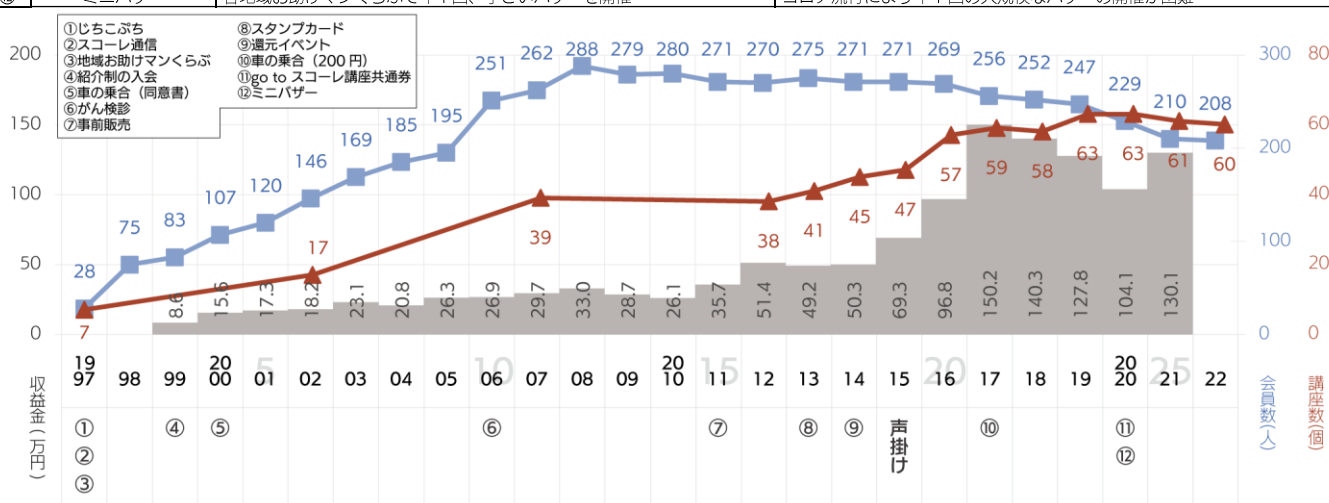


図 2 組織運営の変遷

めたことをきっかけに収益は増加傾向にあり、翌年以降は50 万前後を保っている。また、資金の増加に伴いメンバーへの還元と講座の参加や外出を促す「ポイントカード」「還元イベント」がつけられた。さらに、講座数も17 年目から増加傾向にある。19 年目には、講座毎で「事前販売」実施の声かけを始めてから収益はさらに増加し、20 年目以降は100 万円前後を保っている。また、それに伴って「ポイントカード」の還元金額の上昇や「go to スコール講座共通券」が作られた。

以上より、1～3 年目には組織活動における土台づくりが行われ、4～14 年目には活動を持続させるしくみづくりを行いながらも会員数および講座数が停滞したが、15 年目以降の収益金を生み出すしくみをきっかけに講座数と収益金が増加した。

2-6. 小結

グループ・スコールは老後の健康的な生活を理念として、楽しむことと平等な関係であること、共に助け合うことを大切にしている。また、それらの実現を目指して、発足時期から図3に示す(a)～(f)の目的を持った組織の体制やしくみが作られていた。そして、活動を継続する中で(g)～(j)が作られた。特に、(h)～(j)のしくみが、講座数と収益金を増加させて組織活動を活発にさせている。

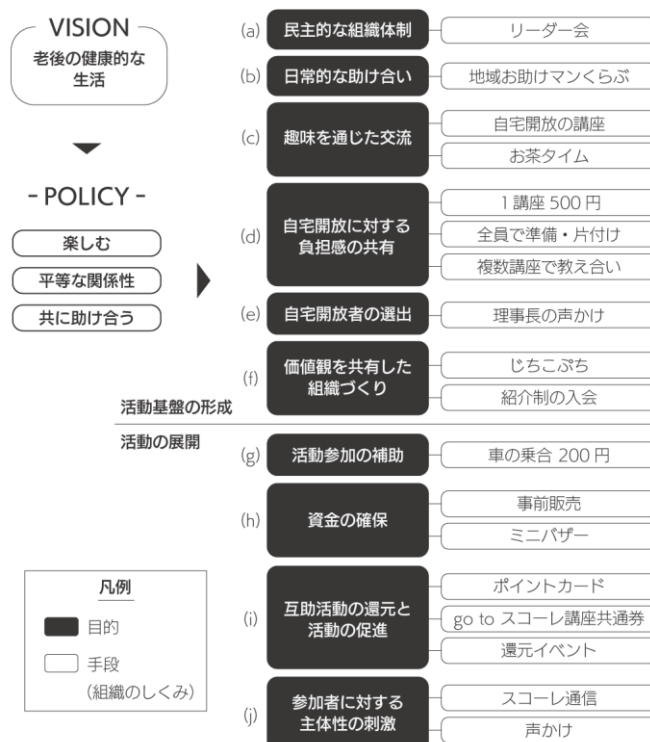


図 3 組織運営のメカニズム

3. 利用者の実態

本章は利用者の意識や活動状況を明らかにする。

3-1. 組織活動における自宅開放場所の実態

会員リストと GIS を用いて作成した、会員の居住地

表 4 訪問調査によるヒアリング結果

00 主体性や互助意識向上の理由
【01T】例えば、KYIさんなんかめだいが前に入ってはいったけど、ほとんど活動してあらへんかったんです。それまで、みんなの話題聞いてり、ちよつとずう行事に参加したりしていかはって、スコーレの良さがわかって、このころ参加はしやうになった。
【02Y】みんなミニバスとかそういうなんで出し合つたものを全部還元しててでしょ。いろんなイベントでも、今度 4500 円くらい 1 人かかると、本部が 2000 円負担するとかね。そういう風なところから、そんなんしてらんだつたら、私らも手伝おうかと、お互いそういつたことがだんだんと、ただ入ってきはってっていうの人も増えてますけどね。だんだん TVK さんや口談つてきとて言うてる。それだんだんとそういつた意識が。
【03S】事前販売とか収益を還元する行事に使うのをみんなで売ったり貰ったりして、還元いけるってのがいいんじゃないかな。まあ、されてない方もいますけど、協力っていうのが一体感も出てくるんじゃないかな。してもなかったから、やっぱりなんかで返そうという。
01 自宅開放の経緯と意識
【04N】なんかコンサートのお会があったんです。その方が病氣になられたかなんかで休んだつたのめかな。そんなんに私もそのコンサートに行っちゃったんで、それからなんか話の拍子に。たくさん録画してし、やってもええよって言うたら、そしたらそれにしうかつなつたね。
【05A】麻雀の回数も増やしたりとか、人数が増えるにつれて、講座も増えてきてついでうような状態。初めはにお家でやってたのは離れだつて、その後、色づえていく中で、こっち(和室や広間)とか使うようになった。
02 現在の自宅開放における意識
【06G】こんなん食べさせてあげようとか、自分が食べて美味しかったもの、自分が作って美味しかったもの。今度これを作ってあげようとかね。そしたら、人の喜ぶ顔が見るやん。それもあるの 1 つですね。
03 自宅開放・講座参加・活動不参加の日の違い
【07T】行く時、気は楽ですね。午前中になんかやってしまうとか。自宅開放の日よりも行く方がずつと楽です。
【08S】参加する日はただ行くだけでいいので。そんなに忙しいですけど、やっぱり開放する日は 2、3 日前からちよつと片づけたりとか。毎日のようにどこか行かれてる方もいられてるで、ま、本当、感心します。月 1 回でも。終わつたと思ったら、もう早いですよ。
04 自宅開放の同居人との関係
【09Y】別に相談もしなかったんじゃないかな。家族は「お母さんはすごいいいことしてる」っていう風には思ってるみたいですよ。
【10T】なんか居つらいつていうか、みんながいてるところにトイレに降りてきてどうこうつていうのは、なんか嫌みたい。それやたらと出て行くことで、大体、図書館行ったり、映画行ったり。
05 自宅開放しない理由
【11M】私、人が来るのは別に嫌じゃないんですけど、皆さんそれぞれ特技があってでしょ。何か 1 日貸してつていうときは、主人に「1 日よろしいですか」って相談してから。
06 近隣住民とスコーレメンバーの違い
【12S】スコーレメンバーで言うところ旅行行ったりとか、誰かのコンサート行ったりとか。たまにありますが。お家招くのも違うメンバーと麻雀したりとか、講座以外のプライベートで。食事が多いかな。
【13M】大変な時、頼も助けに来てくれないけど、UNY さんやたら走ってきれる。今、スコーレで sos お願ひできるのは UNY かな。それと SGS っていう、ご近所の。車乗せてつて言ったら、乗せてくたさような感じ。
【14Y】スコーレの人たちは、お姉ちゃんみたい。なんでなんやろね。なんか、そういう親近感が持てるねん。いろんな話をして、自分のいろんなこと知ってもらえるので、逆にいろんな相談もしやすいのもあると思う。
07 自宅に対する愛着の変化
【15Y】こうしてこの家にいる間はみんな来てくれるだろうし、寂しくないし。確かに時々「贅沢やな、こんな客室あんのは」と思う時ありますけど、どうしようもない、みんな来たらみんなそれ使ってくれるし。
08 居住地域に対する愛着の変化
【16M】そこにあの人が住んでる、ご住んでるっていうのね。広がったというのはある。前は隣近所だけだったのがスコーレの活動を始めてからね。
09 駐車場を介した近隣住民との関係
【01T】お向かいが近隣住民さんへんのですよ。大阪市内のマンションにはいるから、いつでも使いつていって言うてくれたりね。使ってもらった方がいっつていうので、結局、人が出入りしてるのがわかちつて方がいし。

通じて他の自宅開放者に対する感謝と共に返報性の意識を抱いていたことで、講座参加者の増加によって活動空間が不足した際、開放範囲の拡大と開放頻度の増加に至った。一方で現在は、奉仕の喜びや他者からの感謝が活動の動機となっており、ボランティア意識の向上がみられた（表 407）。

3-6. 自宅開放の負担感

自宅開放者は、自宅開放に対して負担感を感じる一方で他の自宅開放者の存在が負担感を軽減しており、複数人の自宅開放による負担感の共有意識がうかがえた（表 408）。

3-7. 自宅開放までの課題

自宅開放者の【UNY】は、活動に対して同居人が共感し、良い印象を持っているが【KTT】の同居人は活動に反対しており、活動中は自宅内の居場所が損失するため外出している（表 409）。一方で、非開放者の【MOY】は、同居人の承諾が課題に感じている（表 410）。

3-8. 活動のメンバーとの関係

メンバーとの交流は、講座外で食事や旅行、趣味を通じた買い物、音楽鑑賞が行われており、麻雀講座を通じて、講座外で自宅開放して麻雀を楽しむ動きもある（表 411）。また「緊急時の助け合いの意識や動き」が生まれており、心を打ち明けて自身に関する様々な話をする関係でもある。

4. 住意識と地域コミュニティの影響

4-1. 定住意識と住宅の捉え方

自宅の捉え方の変化を見ると、入会前後の変化として、両者とも「趣味の場」や「交流の場」が増加しており、住空間の捉え方が変化している（図 7）。さらに、「終の棲家」の増加も見られ、住宅への愛着や住まい続けることの意欲が生まれている。ところが、自宅開放者の方が比較的、入会前後の増加量大きい。これは、自宅開放における広い住空間と講座参加者の存在が関係していた（表 412）。

さらに、定住意識の変化を見ると、「自身の住む地域に対して愛着を持つようになった」が両者ともに高い（3.8pt 以上）（図 8）。これに対して、自宅開放を通じたコミュニティの存在が居住地域に対する愛着の要因となっている（表 413）。つまり、広域的活動を通じたコミュニティの存在が居住地域の意識を拡大させ、定住意識の維持・向上をもたらしている。

4-2. 駐車場を介した近隣住民との関係

自宅開放における駐車場場所の位置をみると、「自宅の前」や「自宅の駐車場」が多い中、一部で「ご近所さんの敷地」の利用がみられる（図 9）。実際に、対面の空き家から一時的に駐車場を借り、空き家のカフェラージュも兼ねて利用していた（表 214）

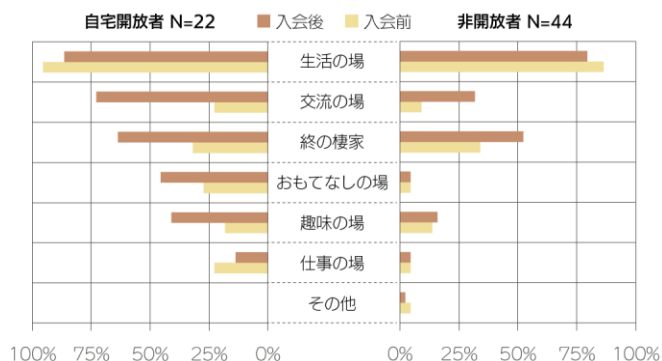


図 7 住宅の捉え方の変化

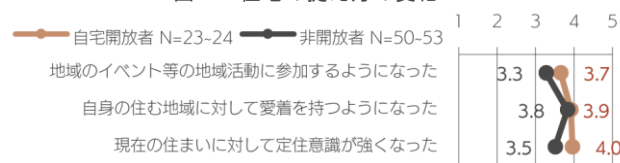


図 8 居住地域に対する愛着の変化^{注1)}

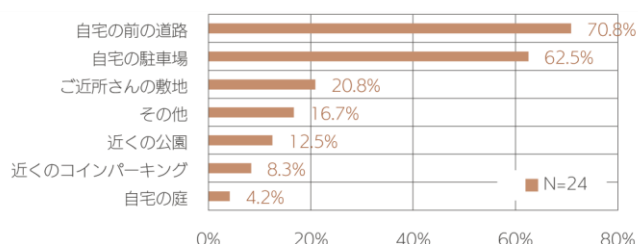


図 9 自宅開放時の駐車場所

5. 住宅の開き方と住空間の影響

5-1. 自宅開放場所の傾向

自宅開放場所は、「玄関」「LDK」以外に「便所」「洗面脱衣室」の水回り部分も多く、「寝室」等のプライバシーの高い居室は閉じる傾向にある（図 10）。

5-2. 住環境整備頻度の変化

両者とも入会後に「他者の住環境に刺激を受けたから」が増加しており、活動が参加者に刺激を与えて自宅の手入れを促している（図 10）。また、自宅開放者は入会後に「来客の頻度が高いから」が増加しており、自宅開放がきっかけで住環境整備頻度が高まっている。

5-3. 住まい方と空き室利用の変化

空き室の利用方法の変化を見ると、入会前後において両者とも「使用していた時のまま放置」が減少し、「趣味の場」が増加している（図 12）。一方で、自宅開放者は入会後に「趣味の場」が大幅に増加しており、自宅開放をきっかけに趣味を通じた空き室の活用が促進している。実際に自宅開放場所の内外で、自宅開放場所を拡張と個人生活のための趣味を通じた居室活用が見られる（図 10）。

5-4. 住戸の改修

自宅開放場所と住戸改修の関係を見ると、自宅開放場所内では「水回りの更新」「床の修繕」といった更新時期に倣った部分的な修繕がみられる（図 10）。また、自宅開放場所外では「2 階便所と洗面コーナー、リビングの増築」で間取りの変更が行われ、自宅開放活動と生活との両立を図っている。

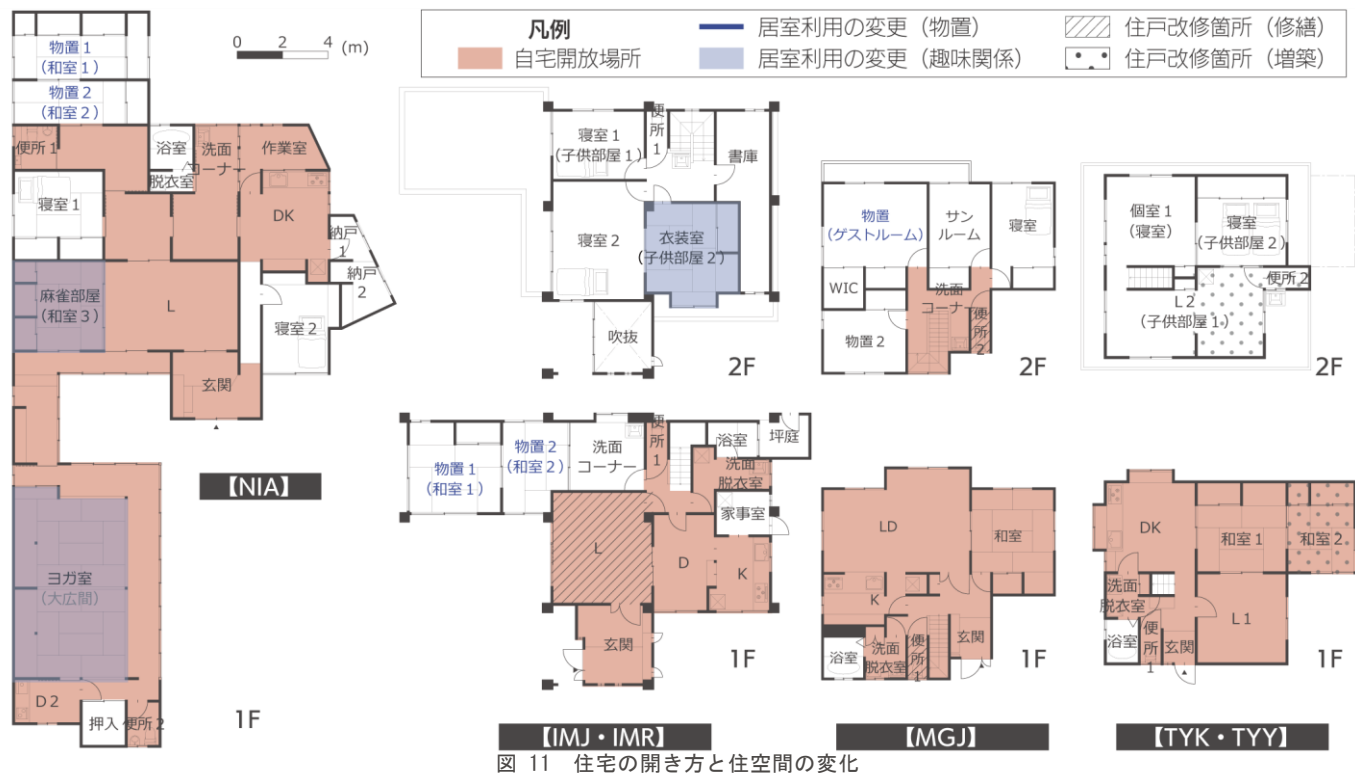


図 11 住宅の開き方と住空間の変化

6. 結論

調査結果を踏まえて、以下の2点について考察する。

6-1. 自治組織の運営における要点

組織運営における体制やしきみづくりの際、活動に参加して交流する中で自然に仕組みを体験して他者に感謝を抱くと同時に刺激を受けるよう、巧妙につくることが求められる。中でも、発足以降の早い段階において図3に示す(a)～(f)を進めることで前向きな活動の参加を促しながら価値観を共有した活動基盤の形成が可能となる。また活動の参加を促すため、(g)も重要である。さらに、共有する価値観の意識を高めるため(h)を進めながら(i)を行い、楽しみを求めている参加者の活動を活発にさせる。それと同時に、組織内の平等な関係性が(j)を引き起し収益金の増加と共に還元量を増加させ、さらなる活動の展開を生む必要がある。

6-2. 自治組織として住宅を開き合うことの効果

複数の自宅開放が従来の区域に捉われない広域的な活動を引き起こし、深い関係性の形成や定住意識の向上をもたらす。つまり、住宅の開き合いが区域に捉われない広域的なコミュニティを形成することで、地域コミュニティに求める機能を補填しながら住み慣れた地域への居住を可能にする。また、自宅開放による駐車場の借用が近隣住民との関係づくりにも寄与する。

住空間においては、自宅のLDKと水回りを開く活動が、当該箇所内外で住環境整備頻度、更新時期に沿った部分的修繕、空き室活用、増築等の大規模な改修をもたらす。これにより、質を維持したままの次世代への住まいの継承を可能にする。

そして、複数人で自宅を開き合う活動が低頻度の開放や負担感の共有を促す。さらに、自治のしきみによ

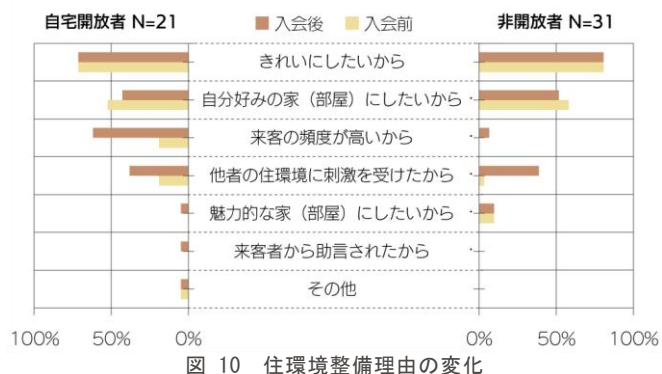


図 10 住環境整備理由の変化

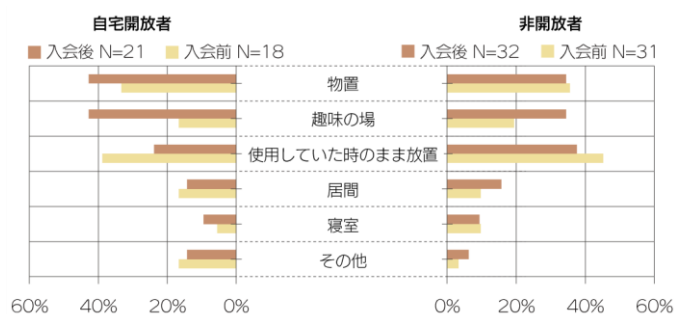


図 12 空き室利用の変化

る平等な関係性が非開放者に刺激を与え、自宅開放場所の増加を引き起こし、さらなる活動の展開を生む。

注

注 1) アンケートの項目に対する5段階評価(「5. 非常にそう思う」「4. 少しそう思う」「3. どちらでもない」「2. あまりそう思わない」「1. 全く思わない」)の平均値。

参考文献

- 1) 大分県：ネットワーク・コミュニティ事例集 ～複数集落等で機能を補い合う～、2018年3月
- 2) アサダワタル：住み開き もう一つのコミュニティづくり 増補版、ちくま文庫、2020年3月10日
- 3) 鈴木智香子：財団法人世田谷トラストまちづくりにおける「地域共生のいえづくり支援事業」制度の運用実態 所有者発意による民有空間を活用した地域公共施設の整備に関する研究、日本建築学会計画系論文集 第75巻 第650号 873-882、2010年4月